

愛媛県 新居浜市

CLOSE UP
人づくり⑬

十一月十五日、新居浜市の人材育成の取り組みなどを取材するため、松山からJR予讃線の特急列車に乗った。車窓からは、左手に波静かな瀬戸内海が所々に顔を出し、右手には四国山地の稜線が続く。そんな景色に見とれること一時間、西日本最高峰の石鎚山など急峻な山々が増えはじめたかと思うと、まもなく新居浜駅に到着した。

駅周辺は土地区画整理が施され、駅前には賑わいづくりの核として建設さ



新居浜市庁舎

れた総合文化施設「あかがねミュージアム」、広場や駐車場、駅南北をつなぐ自由通路などが整備され、自転車歩行者道を設けた総幅員二七mのシンボルロードを軸に整然とした街並みが形成されている。このシンボルロードを通って二〇分ほど歩いたところに市庁舎はある。

新居浜市のプロフィール

新居浜市は、四国の瀬戸内海側のほぼ中央に位置する人口約十二万人の都市。一九九一（元禄四）年に開坑された別子銅山が繁栄の足がかりを築き、非鉄金属、産業機械、化学工業などの住友グループとその企業群により、四国多数の工業都市として発展してきた。別子銅山は、一九七三（昭和四八）年の閉山まで三世紀近くの長い間、住友という一企業によって採鉱された世界にも例のない鉱山で、その事業跡を市内のいたるところに見ることができ



あかがねミュージアムは、その名のとおりの外壁には「あかがね=銅」の板が流線状に張られている

した観光振興に力を入れており、その拠点として、テーマパーク「マイントピア別子」を第三セクター方式で運営している。

マイントピア別子は、端出場（はでは）と東平（とうなる）の二つのゾーンからなり、端出場ゾーンには、鉱山鉄道、観光坑道、砂金採り体験パーク、天然温泉などがあり、幅広い世代が楽しめる。東平ゾーンは、かつて別子銅山の採鉱本部が置かれ、社宅・学校・娯楽場・接待館が建てられるなど山の町として賑わっていたところで、天空にそびえるようなその景観から「東洋のマチュ



四国三大祭りに数えられる「新居浜太鼓祭り」

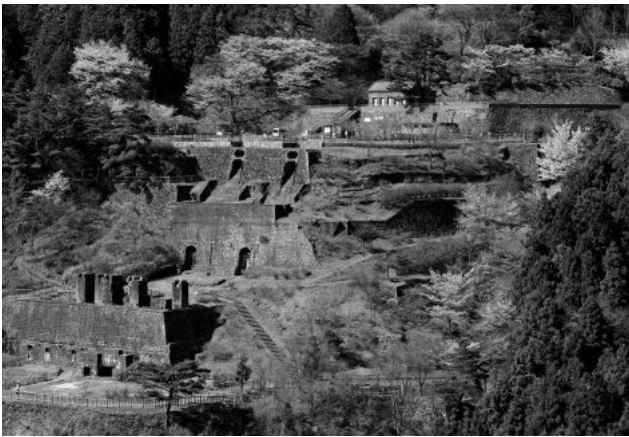
ピチュ」とも呼ばれている。貯鉱庫、索道基地、インクラインなどの遺構が集中しており、歴史資料館やマイン工房などの施設も整備されている。

また、別子銅山とともに全国的に名高いのが、毎年、十月中旬に開催される「新居浜太鼓祭り」。徳島の阿波踊り、高知のよさこい祭りと並ぶ四国三大祭りに数えられ、金糸銀糸に彩られた五〇台を超える絢爛豪華な太鼓台が市街を練り歩き、期間中は県内外から二〇万人もの見物客で賑わう。最大の見どころは、複数の太鼓台が市内各所に集まり、重さ三トンを超える太鼓台を一

五〇人余りのかき夫と呼ばれる男衆が担ぎ上げ、その勇壮さを競う「かきくらべ」。男衆を鼓舞するように太鼓が早打ちされ、見物客を巻き込み、祭り最高潮に達するという。

総合戦略に見る 新居浜市のまちづくり

新居浜市のまちづくりを「新居浜市総合戦略」（平成二十七年十二月策定）から概観すると、目標人口の達成と「住みたい 住み続けたい あかがねのまち」の実現を目指して、四つの基本目標を掲げている。一つは「雇用の創出



別子銅山の産業遺産を活用したテーマパーク「マイントピア別子」端出場ゾーン（上）と東平ゾーン（下）がある。

と地元産業の振興」で、本市の基幹産業であるものづくり産業の振興、住友各社との連携強化や企業誘致の促進が主要施策。二つは「定住人口・交流人口の拡大」。健康で活動的なアクティブシニアを対象とした全国初の企業城下町版CCRCの導入などの施策で、移住・定住の促進を図る。また、別子銅山の近代化産業遺産群の活用等により、交流人口の増加を推進する。三つは「子育て支援の充実と健康長寿社会の実現」で、子育て世代への経済的支援の拡充など子育て支援の充実を図るとともに、健康寿命を延伸する。四つ

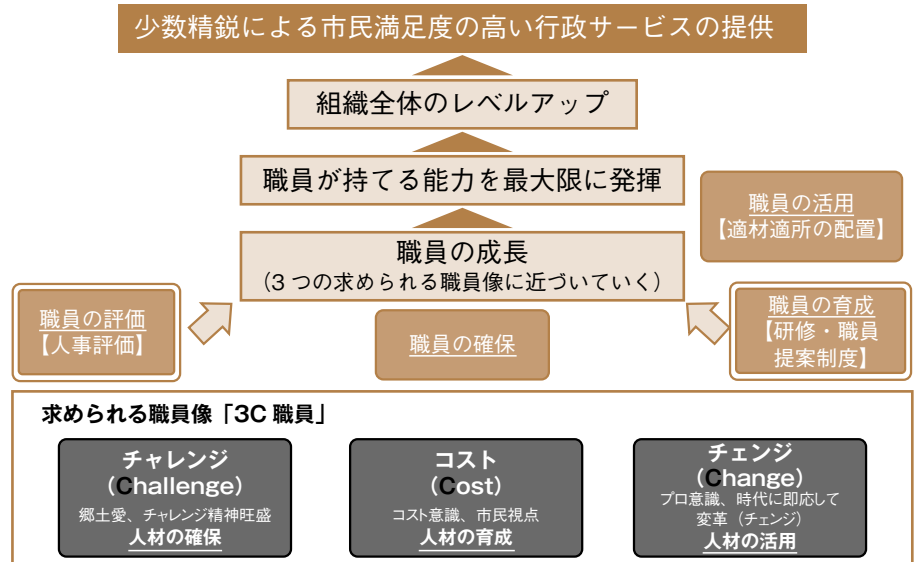
は「広域連携と地域特性を踏まえたまちづくりの推進」で、三市（新居浜・西条・四国中央）連携やまちのコンパクト化を推進するとしている。

まちのコンパクト化に関しては、平成三〇年度を目途に「立地適正化計画」「公共施設再配置計画」の策定を進めているが、この点に触れて、建設部次長（兼）都市計画課長の庄司誠一氏は、「新居浜市を含む東予広域都市計画区域では、市街化区域と市街化調整区域との区分、いわゆる線引きを平成十六年に廃止しました。どこにでも家を建てられるようになったわけですが、人口が減っている中で、市街地がより広がっているのかということ、今後、限られた予算の中で、広がっていった市街地をどう維持管理していくかが大きな課題」と話した。

人材育成の取り組み

新居浜市の「人材育成基本方針（第

新居浜市の人材育成の概念図



一次改訂版」を見ると、(図)のとおり、求められる職員像として3C (Challenge・Cost・Change) を定めている。そしてこれら三つの職員像に近づき、市民満足度の高い行政サービスが提供できるようになるために、研修・提案制度などによる「職員の育成」や人事評価制度を活用した「職員の評



お話を伺った新居浜市職員の皆さん

「価値」などの方策に取り組んでいる。

研修については、職場研修、職場外研修、自主研修の三本立てで実施しており、さらに職場外研修は、職位や経験年数に応じて必要な知識を習得する「基本研修」、時代に即した研修や、人権感覚、OA能力等の向上を図る「特別研修」、組織内では得られない高度で専門的な知識や幅広い見識を養う「派遣研修」に分かれている。

特別研修の一つ、技術職員向けに三年前から実施している「技術職員研修」は、庄司次長が中心になって計画して

いるもので、今年度は「各課の事業内容説明」「工事検査班による研修」「立地適正化計画ワークショップ」「測量設計実地研修」の四研修を実施した。

この研修を計画した理由を庄司次長に伺うと、団塊世代の大量退職による技術継承の課題や、事業量の減少や民間への業務委託の増加に伴い、技術職員の現場経験が不足している現状に触れながら、「特に若手職員を見てみると、

自分で測量したり、設計したりする基本的な部分が疎かになっていいると感じています。現状の仕事で手いっぱいなのは分かるのですが、研修を通じて、そうした技術力を少しでも身に付けてもらえれば」とその意図を説明した。

当センターは派遣研修の一機関として「職員研修計画」にも紹介されており、〈表〉のとおり、平成二九年度は九名の職員を派遣いただいた。研修予算を組む人事課の塩崎秀一副課長は「派遣にあたっては、事業との兼ね合いで職務命令の場合もありますが、基本的には予算の枠内で職員本人の希望を優先しています。また受講後は、報告資料をつくって課内で発表するなど、その成果を共有する取り組みもお願いしています」と説明する。そして、

センター研修の評価に関して、豊富な研修メニューや講師陣の充実ぶりを指摘した。

センター研修を受講した感想

センター研修の感想については、水道局工務課の立花由貴さんと秋山弘弘さん、建設部道路課の村上智彦さんにお話を聞くことができた。

立花さんは平成二八年、下水道建設課所属のときに設計のことをもう一度勉強し直したいと、『土木技術のポインントA（計画・設計コース）』を受講した。「基礎工や仮設工、各種構造物の計画設計を幅広く学んだ」と振り返り、「特にボックスカルバートの計画設計では構造計算のやり方を詳しく説明いただき、実際にそうした仕事を担当することが多かったので、仕事にもすごく役立つ」と話した。

秋山さんは今年度の『アセットマネジメント』を受講。「今年から本格的にアセットマネジメントと経営戦略を練り直す作業がスタートしたため、研修を通してアセットマネジメントのイメージをつかんでおきたい」と思ったのがきっかけだった。アセットマネジメントの先進地である仙台市の講義が

新居浜市のセンター研修参加状況（平成29年度）
【参加人数：9名】

参加研修名	研修期間
建築設備工事監理	4日
建築確認実務Ⅱ	4日
建築リニューアル	3日
空き家対策	3日
建築物の環境・省エネルギー	3日
建築設備（電気）	10日
アセットマネジメント	3日
コンクリート構造物の維持管理・補修	3日
PC橋の維持管理	3日

印象に残っていると言いつつ、「レベルがすごく高いなと思ったのですが、どんなアセットマネジメントも本気で取り組まないときちんとできないことを教えられた」と話した。

補修を担当する村上さんは、新規採用で入って三年目の平成二八年、道路全般のことが知りたいたいと思って『市町村道』を受講した。橋梁やトンネルの五年に一回の点検義務化に対して、やり過ぎではないかと思うところもあったそうだが、「笹子トンネル事故からの経緯などを知って、維持管理の大切さを再確認できた」と話し、「研修後はより高い意識で老朽化対策に取り組めるようになった」と収穫を口にした。